

Title	なぜライブニッツにおいて力の概念が問題となるのか：物体と運動の現象性についての一考察
Sub Title	Why the concept of the force pops up in Leibniz's philosophy: A brief thought on the phenomena of the body and the motion
Author	今野, 諒子(Konno, Ryoko)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2010
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.4, (2011.) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20110000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なぜライプニッツにおいて

力の概念が問題となるのか

物体と運動の現象性についての一考察

今野 諒子

はじめに

G.W.ライプニッツは、政治学者・法学者として活躍し、その哲学は政治的折衝の文書起草から最も抽象的な形而上学にまで及んでいた。そのように具象から普遍に至る彼の思考の中心には実体概念があり、それは物件としての物的実体概念から倫理的基体としての人格・人工的人格としての法人にまで及んでいる。しかし、魂や精神といった心的概念を範とする倫理的基体を実体概念の中心に据えて物体を現象として副次的な存在と解釈する場合と、物理的な物体概念をも実体として積極的に解釈する場合とで、ライプニッツ哲学の全景が大きく異なってくる。その問題は、一方ではライプニッツ自身の記述の仕方に起因し、他方では後代の解釈者に起因している。前者については、たとえば 1712 年 2 月 5 日付けの「デ・ボス宛書簡」に代表されるように、ライプニッツ自身が物体を純粹な現象と見なす解釈と物体を実体と見なす解釈の両方を提示しているという事情が挙げられる。また後者については、「物体は実体か現象か」という問題設定のもとで、様々な解釈が提示され続けている事情がありⁱ、物体概念の位置付けがライプニッツ哲学の理解をより困難なものにしている。

本論では、ライプニッツ哲学における物体概念を、実体か現象かという二者択一的な問題設定のもとで解釈するのではなく、ライプニッツが物体に対して段階的に実在性を付与しようとしている姿勢に鑑み、物体が心的概念と対比された場合に現象として位置付けられる事情と、物体概念と切り離すことのできない運動の概念についても、それが現象と言われる所以について考察を進める。ここで予め筆者の立場を示しておくならば、「物体は実体か現象か」という従来の問題設定のもとでは、筆者は後者に与する。しかし、本論で詳述するが、ライプニッツが物体や運動を「現象」として把握する場合、それは実在性を欠いた全くの認識論的な構成物であることを意味してはいない。ライプニッツは心的概念の持つ一性を範とする一方で、可分性の観点から事物の持つ実在性について考察しているからである。こうしたライプニッツの姿勢は、特に力学上の取り組みに依るところが大きいⁱⁱ。それは力学が質料と形相の両側面において、物体が具体的にどのような本性を持つものなのかを示すからである。

本論ではライプニッツが力学の領域で練り上げた力の概念に着目するⁱⁱⁱ。ライプニッツにおいて、力の概念は活力保存則をめぐる問題とともに深化した経緯がある^{iv}。勿論、ライプニッツは 1670 年代初頭の『抽象運動論』の頃から、物体の運動理論に並々ならぬ関心を寄せ続けたが、本論で依拠するのは、ライプニッツが幾何学的な運動論から脱却してからの力の概念である。ライプニッツが、物体の本性をそこに保存される力とともに考察し始めて以降、物体や運動が現象でありながら或る種の実在性を持つものと解す可能性が開けてくると思われるからである。以下、本論の第 1 章では、一性と可分性の観点から物体のもつ段階的な一性について考察し、続く第 2 章では、力の概念について概観する。そして最後に第 3 章では、物体と運動の現象性について考察してから、ライプニッツの現象概念一般について論じる。

1：一性と存在

1-1：集合の事例

ライプニッツは、事物の存在を「一性」によって規定する。1687年4月30日付けの「アルノー宛第16書簡」において、アクセントの位置を変えながら「真に一つの存在でないものは、また真に一つの存在ではない。」¹という命題が主張されているように、一性が事物に存在を認めるか否かの基準となっている。ところで、一性と存在を結びつける思潮は哲学史上で様々な形で展開されてきており、上記のように記述の仕方に趣向を凝らすまでもなく、ライプニッツが交流した知識人の間では学問上の常識と見なされていた事柄だったろう。では、ライプニッツの主張の眼目はどこにあったのだろうか。ライプニッツは、一性を魂を範としながら規定する一方で、複数の事物からなる集合あるいは或る一つの物体の一性を段階的に定めようとしている。まずは、ライプニッツが一性に対立させた「多」の概念について考察することから始めよう。

ライプニッツが「一」に対立させる「多」とは、「寄せ集め (aggrégation, aggregatum)」である。あくまでも、それらは魂の持つ一性に対置されるが、ライプニッツが真に一でないものとして挙げる事例は、その多様な特性から、寄せ集めに属するものとして単一に解することはできない。その個別の事例において、どのような点が一性と相容れないのかを検討することで、多の概念に迫ることができる。以下では、物体や人の集合の事例について検討してから、単一の物体の事例について考察する。

まず集合の事例として挙げられるのが、「アルノー宛書簡」で散見されるダイヤモンドの事例と、羊の群れや軍隊の事例である。ライプニッツによれば、二つのダイヤモンドを接触させて一つの指輪にはめ込んだ場合、便宜上それを一つのダイヤモンドと呼ぶことができ、また同一の運動に従うものと見なすことができるが、あくまでもそれは「付随的に」である。ここで出来上がった物体は「付随的一 (unum per accidens)」にすぎない。

そして、物体の集合を一つのまとまりと見なすことを可能にしているのは、想像力や表象の働きに依るものとし、その物体は現象であるとライブニッツは主張している^{vi}。

ところで、ここで言われている「現象」とは、物体の集合を人間の精神の働きに完全に依存する構築物と見なすことを意味しているのだろうか。この点について示唆的なのが、軍隊や羊の群れの事例である。ライブニッツは上述のダイヤモンドの事例に続いて、これらの事例に言及しているが、ここでは事例の対象が生物か無生物かの違いは不問にし、ライブニッツが両者を同じ文脈で、寄せ集めであると判断している根拠について考察してみたい。ライブニッツは、寄せ集めによる存在の本質を、それを構成している諸存在の存在の仕方に求めて、たとえば軍隊の本質を、その構成員である人間の存在の仕方にあると見なしている。また、羊の群れの場合には、複数の羊が密着しながら歩調を合わせたりすることなどが群れの本質として挙げられている^{vii}。ライブニッツがこれら集合の構成員の存在の仕方に言及していることから、この文脈での「現象」とは、何ものも存在せず、寄せ集めが観念的な構築物であることを意味してはいないだろう。二つのダイヤモンドは一つ一つに分解することが可能であり、多数の構成員が共存する軍隊や羊の群れの場合には、それらを一人の人間、一頭の羊にまで区切っていくことが可能である。ライブニッツが複数の事物を集合と見なす際に想像力や表象の働きに言及しているのは、存在する諸事物に根ざす寄せ集めが、本来的には最小単位にまで分割可能である一方で、通常は一つのまとまりと見なされている事態の原因を指摘するためである。ここでは、集合の最小単位の人間や羊の存在自体が疑われているのではないはずである。

1-2：寄せ集めとしての物体

次に単一の物体の事例について考察したい。上述した集合体の事例と同様に、物体の本質が可分性という観点から検討されるが、ここでは新た

な問題が付け加わる。すなわち、物体が真に存在しているとすれば、それは何に依存するのかという問題である。前掲のアルノー宛書簡における、一性と存在の互換性を表した標語から判断するならば、可分性をもつ物体は存在しないことになるが、物体の分割された諸部分についても段階的に一性を認めるライブニッツの方法も併せてみるならば、物体の存在を完全に否定することは難しくなるのである。以下では、『新説 フーシェ氏の異議についての備考』における事例を取り上げ、物体の一性の問題について考察したい。

ライブニッツは抽象的な数や線と対比させて、物体の可分性について考察している。議論の要点は、数や線の場合と物体の場合とでは、分割したり合成する際に、全体と部分のどちらを先行するものと見なすかという点で差異があるということである。ライブニッツによれば、両者の差異を混同することから「連続体合成の迷宮」が生じるのだが、その迷宮の問題には立ち入らず、ライブニッツの議論の概略を示すことに務めたい。

ライブニッツによれば、数や線のような観念的な存在と、物体のような現実的な存在には、分割や合成のための根本的諸要素 (*premieres elements*) があるのか否かという差異がある。前者にはそれが欠けているが、それは次の例によって示される。抽象的な数の場合、たとえば $1/2$ という分数は $1/4 \times 2$ とも、 $1/8 \times 4$ とも表すことができ、その関係は無限に続くので、最小の分数に達することはできない。つまり数においては、他の数を根本的要素と規定し、合成することによって或る数を作ることができない。また、 $1/2$ 、 $1/4$ という相互に独立した数の場合、その観念的順序を考えると $1/2$ を更に半分に分けると $1/4$ になるので、 $1/2$ は $1/4$ という部分的関係に先立つ。同様にして線の場合にも、根本的要素として指定できる部分はなく、全てが無規定 (*indefini*) であるから、全体を部分よりも先に指定しなければならない。これに対し、物体には分割や合成の際に具体的に指示することができる根本的諸要素がある。数学的存在に対し、現実存在する物体においては、分割や合成が繰り返し可能な点で、全体に対

して真の一性を認めることはできないが、その諸部分には段階的に一性を認めることができる。物体の実在性は、物体の緒部分が持つ一性に支えられているのである。従って、観念上の数学的存在とは異なり、現実存在している物体の場合には部分を全体よりも先に措定しなければならないのである^{viii}。

1-3: 物体の一性

可分性の観点から物体の持つ一性について考察してきたが、諸部分に由来する物体の一性をどのように考えるべきなのか。ライブニッツは自身の自然学における研究の来歴を述懐する文脈で、一性について次のように述べている。

「はじめに私がアリストテレスの〔学説の〕束縛を逃れた時には、空虚と原子とにのめりこんだ。それが一番よく私の想像力を満足させたからである。しかし、こうした説を改め、よく考察した挙句、真の一性の原理を質料 (matière) の中の中にのみ、つまり受動的なものの中の中にのみ見出すのは不可能であることに気が付いた。そこではすべてが、どこまで行っても諸部分の集合や堆積でしかないからである。」^{ix}

ここでは、真の一性を質料の内に見出していくことの困難について言及されている。質料は無限に分割可能なため、一性は段階的にしか認められないが、物体が自然学の領域で対象化されるためには、上述した複数の事物から成る集合の場合のように、暫定的な或る種の一性が必要である。この場合に求められる一性とは、「恣意的な一性 (arbitrariae unitas)」^xである。物体は厳密には実体でないが、我々が実体のように扱う事物である。こうした性格を受け、ライブニッツは物体を「疑似実体 (quasi-substantia)」^{xi}と呼んでいる。

最小単位に辿り着くまで物質を分解し続けても、その作業は無限に続くので、一性を見出すことはできない。物体に段階的にでも一性が認められるのであるならば、それはどのような意味においてなのだろうか。

「物体は構成要素としての一性から合成されているのではなく、そこから帰結する (résulter) ののである。というのも、物体ないし延長している物体は、虹や幻日のように、事物のうちに基礎づけられた現象でしかなく、その全体の实在性は諸々の一性が有しているものでしかない。」^{xii}

ここで注意すべき点は、ライブニッツは物体が構成要素としての一性から「帰結する」と述べている点である。物体においては、確かに分割や合成が可能だが、それは質料の側面に関して言われているのであり、一性に関してではない。具体的に存在している物体には分割や合成可能な根本的諸要素があるが、その諸要素が実際に指示し得るかたちで存在するために一性が指定されているのである。物体に認められる一性とは、そうした諸要素から由来している。物体は疑似実体と呼ばれる場合もあるが、それは物理的な实在性を欠いた認識論的な構成物を意味してはいない。上記の引用でも言われているように、あくまでも事物のうちに基礎づけられているのである。そして、物体の全体に帰される一性は実体的形相 (forme substantielle) として位置付けられる^{xiii}。ライブニッツにおいては、形相概念が力の概念と共に規定される点に特徴がある。以下に、それを示すライブニッツの言葉を提示しよう。

「私 [ライブニッツ] は実体的形相の本性は力に存すること、そこから何か感覚や欲求に類比的なものが帰結すること、そしてそれゆえ、実体的形相を我々が魂について持っている概念と類比的に考えねばならないことを知った。[中略] アリストテレスはこれを第一エンテレケイアと呼んでいるが、私はそれよりも理解し易いように根源力 (forces primitives) と呼ぶことにする。」^{xiv}

感覚や欲求と魂の関係^{xv}については本論の範囲を超えるので詳述しないが、ライブニッツが実体的形相を「根源力」と呼んでいる点に着目したい。ここでは、形相と力の概念との結びつきが示唆されているのみだが、ライブニッツは質料についても力の概念と共に規定する。次章では、これらの関係について概観したい。

2: 力の概念

ライプニッツは力の概念において、形相の側面においては能動的力を、そして質料の側面においては受動的力を措定し、両者を更に「根源力 (vis primitiva)」^{xvi}と「派生力(vis derivativa)」とに二元化する。すなわち、形相の観点からは「根源的な能動力」と「派生的な能動力」を、質料の観点からは「根源的な受動力」と「派生的な受動力」を措定する。能動と受動の違いに関わらず、力は派生力として現れ、それを基礎付けるものとして根源力が措定されるという関係にある。

まずは能動的力の概念から概観したい。根源的な能動力とは、物体ないし実体の一性を担う実体的形相に相当し、他に「第一エンテレケイア」とも呼ばれる。そして派生的な能動力とは、事物間の相互作用を介して、根源力の制限として現れるものである。たとえば、運動において見出される物体の作用は、能動的な派生力からの帰結と考えられる。派生力は、運動として多様な仕方で現れるが、そうした継起が能動的な根源力によって秩序づけられているという関係にある。物体に備わる本来的な能動性をライプニッツは次のように述べている。

「能動的力は何か実現作用すなわちエンテレケイアを含んでいて、作用する潜勢力と作用そのものとの中間に位置し、傾向力 (conatus) を有している。従って作用に移るには自身の力により、助力を必要とせず、ただ障害を取り除いてもらいさえすればいい。」^{xvii}

派生力は物体間の相互作用を介して現れる。物体の変化は、外的な相互作用によって生じているように見えたとしても、それは変化が生じるためのきっかけにすぎないのであり、物体は本来的には自発的に運動しているのである^{xviii}。

そして受動的力については、「第一質料 (materia prima)」と「第二質料 (materia secunda)」とに区別される。根源的な受動的力が前者で、派生的な受動的力が后者である。前者は「不可入性」、「抵抗つまり惰力

(inertia)」のことで、物体の大きさに比例して存在するものである。物体の本性が、他の物体に浸食されない「不可入性」だけでは、駆動力を持った小さな物体がその駆動力を失わずに、静止した大きな物体を動かすという背理が起こる。そこで物体には抵抗が認められねばならない。「惰力」としての抵抗とは、ケプラーが変化に反対する自然的恒常性、静止への傾向性として提示した概念である。この力によって、物体は自身に対しては運動を拒否し、他の運動体に対しては、その駆動力を減殺することなしには自身は動かされないのである。こうした本性を持つ第一質料が物質の受動性である。これに対し、後者はこうした本性を持つ第一質料に秩序付けられた現れとしての「物体」である^{xix}。

3：現象

3-1：物体の現象性

一性と力の観点から、物体の実在性について考察してきたが、心的概念の持つ真の一性を範とすれば、前者の実在性は薄らいでいくと言わざるを得ない。ライブニッツが「デ・ボス宛書簡」で述べているように、物体の在り方に関しては二つの解釈が浮上してくる。ライブニッツに従って、その二つの解釈をまとめてみると以下ようになる。

まず一つ目の解釈は、物体を純粋な現象と見なすものである。この場合、我々の魂を一性の基準し、寄せ集めである物体は真の一性を持たない現象と見なされる。そして二つ目の解釈は、物体に実体的なものが付け加わっていると見なすものである。物体は可分的で、その質料性を担う部分は生成消滅の流動性を免れ得ないが、その結合に実在性を認め、実体的なものが付け加わっていると見なされる^{xx}。

ライブニッツは、これら二つの解釈をあくまで仮説として提示しているが、そもそも、何故このような二つの解釈が生じているのだろうか。これらの解釈が提示されたのが書簡であるという性格上、常に相手に応じて

自らの見解を敷衍していかざるを得なかったという対外的な要因も指摘できるが、ライブニッツの思考そのものに起因する揺らぎとも言える緊張関係が存在したのではなかろうか^{xxi}。前章までの結論を受け、物体が真の一性を持たず、魂と同等の存在ではないとしても、完全に実在性を欠いた存在でもないことは明らかであろう。物体は本性上、諸部分に由来する実在性しか持たなくとも、その諸部分に由来する一性から、我々はそれらを一つのまとまりと見なすが、ライブニッツはそこに具体的に存在している事物に根ざした「抽象化」の働きを見出している。抽象化とは或る物体の部分的な力を捨象し、どの物体にも当てはまる普遍的な規定を与えることである。

ライブニッツは、延長を物体の本性とするデカルトに対し、延長 (*extensio*) と延長体 (*extensum*) の区別を主張する。ライブニッツによれば、延長は延長体から抽象されたものである。延長は多数性、連続性、共存性に分解される相対的な概念に過ぎない。例えば、多数性は数にも属するが、多数性と数そのものが実体として現実存在するのではないように、延長そのものも現実存在するものではない。だから、物体が現実存在するには、実際に数えられるもの、反復されるもの、連続するものが必要なのである。つまり、延長は延長している何ものかの延長でなければならないのである^{xxii}。延長体には、連続的に共存する多数の事物が見出されるが、この諸事物を抽象化して連結させ、数において一つのもを表しているのが延長である。延長は現実存在する諸事物のいかなる変化にも左右されずに、事物の数的な同一性を示している^{xxiii}。こうした数の上での一性を自然界に実在する事物にそのまま適用することはできないが、個々の現象を自然学の組上に載せて説明するためには欠かすことのできないものである^{xxiv}。こうした抽象化に根ざした方法から伺えるように、物体は魂の一性を基準とした場合に、同等の一性を持たぬものとして完全に実在性を剥奪されるのではなく、実在に根ざしていない空想的な現象と同等にされるのでもない。物体现象性と実在性の両義性をもった概念である

と位置付けられるだろう。

3-2: 運動の現象性

運動に関しても、物体の場合と同様に、その現れが問題となる。我々が力学において対象化する運動は、派生的な能動力から帰結するが、派生力の実在性は瞬間的なものである。そこで運動そのものだけを取り出した場合、厳密に言うならば、そこに実在的なものはない。ライブニッツは以下のように述べている。

「運動は（時間と同じく）、厳密に言えば、存在するものでは決してない。というのは、諸部分が共存していないのに、全体が存在するということは決してないからである。従ってまた運動の中には、変化をもたらそうと努めている力から構成されるべき瞬間的なもの他には、実在的なものは何もない。」^{xxv}

ライブニッツによれば、我々が現に把握する運動とは、場所の連続的变化であり、派生的力はこうした変化を次の瞬間に向けて生み出していくものである^{xxvi}。また、派生力そのものが根源的力に対して、一に対する多という関係を持っているので、派生的力から帰結する運動は、「寄せ集めの現れ (apparentia aggregatorum)」である。そして、ライブニッツはそのような現象について基礎付けられて (fundata)、規則的(regulata)であると主張する^{xxvii}。「基礎付けられている」ということの意味は、運動が力からの帰結であることから明らかであるが、現象としての運動が規則的であることの意味について、いま少し考察してみたい。ライブニッツの現象についての考え方を『実在的現象を想像的現象から区別する仕方について』を参照して概観してみよう。

ライブニッツは、現象が実在的であることの徴標として、現象における性質が生き生き (vididum) とし、多くの観察に適って多様 (multiplex) で、適合的 (congruum) であることの三つの点を挙げている。この中で、特に重視されるのが適合性である。適合性は、或る特定の現象

そのものだけを考察した場合と、その現象に先行する現象やそこから帰結する現象との間で考察される場合がある。前者については、或る現象そのものが複数の諸現象から成り、それらの現象の理由が相互の関係に求められるか、それらが共通の仮定によって与えられる。また後者については、現在の現象と先行する現象が同一の恒常性を持つか、その恒常性の理由を先行する現象から引き出し得るか、あるいは共通の仮定によってすべての現象が与えられる場合に適合的である。こうして、ライブニッツが最も堅固な徴標として挙げるのが、現象と全生活の系列との合致と、これまで用いられてきた理由や仮定、これまで観察されてきた恒常性に基づいた、未来の現象を予言することの成功である。しかし、このような基準は、検討の対象となっている現象が、他の現象と齟齬を来すような想像的現象ではないことを示すためのものであり、現象に形而上学的確実性をもたらすためのものではない。あくまでもそれは、現象が実践的確定性 (*certitudo moralis*) を持つための徴標に過ぎないのである ^{xxviii}。

ここでのライブニッツの議論の眼目は、我々が実践において実在的だと見なしている現象について、その確定性を見積もるための判断基準を与えようとする点にある。運動の場合については、上記の実在的な現象の徴標に照らして、各瞬間の運動が適合的に連結しているという点に実在性の徴標を求めることができる。運動を現象の次元で把握する場合、その連結は幾何学に代表される数学に基づいているので、現象の公的な性格は恒常的な継起の他に数学によってもたらされる。また運動は能動的な派生的力に由来する瞬間的な実在性も持つので、それが現に存在するか否かという問題からは免れた形で現象として存在しているのである。

3-3: 現象の意義

ここで、物体と運動における現象性と力との関係について整理するために、ライブニッツの「現象」概念の二つの意味を確認しておこう。力学で扱われる物体に認められる力は、根源力に対する派生力であり、その派

生力から結果するのが運動である。派生力は瞬間的な実在しか持たないのに対し、物体の同一性を持続的にするのを支えるのが根源的力であった。運動は物体の実在性を支える根源的に派生的力を介して関係づけられるので、瞬間的な現れといえども、物体の持つ実在性に根ざしているのである。根源的力、派生的力の区別においては、まず根源的力が措定され、その後に派生的力が運動として現れるような前後関係を成しているのではない。物体には確かに力が内在しているが、それは派生的に瞬間的な運動としてしか現れることができず、また逆に言えば、瞬間的な運動にはその実在性を支える根源的力が認められるということなのである。根源力と派生力とは、物体の運動を通して同時に見出されるものである。そこで、我々が力学で対象とする派生的力は、根源的力に対する偶有性として位置づけられる。こうした持続的な実在に対する瞬間的な実在としての在り方が、「現象」の第一の意味である。一方、自然学としての力学の領域では、始めから物体の内在的力と運動を切り離し、運動を機械論的に説明する。これは、物体を構成する具体的な要素が持つ力を抽象化することである。現実存在している個々の要素からなる物体に対して、それらを抽象化して物体を見ることが「現象」の第二の意味である。

物体と運動においてそれぞれ固有の現象性が問題となるのは、自然界に存在する事物を現象の領域において見るか、実在の領域において見るかによって違いが生ずることに起因している。ただし、現象と実在の二領域の区別は両者が完全に切り離されたものであることを意味するのではなく、またその区別が実在的なものであることを意味するのでもない。自然学の領域を確固たるものとして確立するためには、事物から力を捨象しなければならず、逆に事物が真に実在している姿を捉えるためには、事物に力を認めねばならないということなのである。

ライブニッツにおいて、こうした見方を可能にしているのが、根源力と派生力とに二元化した力の概念なのである。物体と運動が力の概念と結びついているという論点は、力の概念が二元化する以前の著作においても

見られる。たとえば『形而上学叙説』17節で示されている力の概念は、運動を通じ保存される不変量を表すのみである。しかし、物体と運動に固有の現象性を理解するには、力の概念が根源力と派生力とに二元化され、実在性と現象性を担う概念へと深化したという契機が決定的に重要である^{xxix}。

ライブニッツにおいては、能動と受動のそれぞれの派生力の持つ実在性に焦点を当てた解釈と、魂の持つ一性を基準とし、それ以外の事物の持つ実在性を低次のものとする解釈のどちらか一方に依拠した場合に、「物体は実体か現象か」という問題に象徴されるような解釈上の問題が生ずる。しかし、力の概念の変遷に目を向け、力の概念の二元化を積極的に評価することによって、物体のもつ実在性と現象性という両義性が理解可能になると同時に、運動の現象としての性格も、力学の学問領域を開くものとして積極的なものと評価することができる。こうした意味において、力の概念の深化はライブニッツにおいて画期的な出来事であったと言えるだろう。

(このの・りょうこ 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程)

ⁱ ライブニッツの物体概念を實在論的に解釈した研究としては、松田（2006）が挙げられる。一方、物体概念を現象と解釈した研究としては、Adams（1983）が挙げられる。

ⁱⁱ 延長を本性とする物体は分割可能であるから真の実体ではない。こうしたライブニッツの見解が自然学の領域において見られるようになるのは、1672年以降である。cf. Gueroult（1934）p.172

また、本論では、ライブニッツにおける一性の概念の射程を力学に焦点を当てて考察するが、論理学をはじめとする他の領域からの解釈も存在する。たとえば、実体が不可分で単純であるとしても、実体の概念そのものは単純ではないという指摘については、石黒（2001）を参照されたい。

ⁱⁱⁱ ライブニッツにおける物体概念を形而上学的に考察することに加えて、自然科学上の業績も併せて論じたものとしては、Gueroult（1934）が研究の定石である。また、近年の研究としては Fichant（1998）、（2004）を代表として挙げる事がで

きる。筆者は、ライブニッツの実体概念の探求には形而上学的考察だけでは不十分で、力学的な考察も必要あると考えているが、その射程が魂や精神などの心的概念、さらに倫理的基体としての人格にまで及ぶのか否かという問題については今後の課題としたい。Fichant (2004) では、物理的な力の概念が実体的形相やモナドの概念に及ぼした影響について論じている。その点については、注 xxix を参照されたい。

- ^{iv} 本論では、活力論争についての詳細な議論を割愛するが、以下にその概略を記しておきたい。物体に保存される力の尺度を巡って、ライブニッツとデカルト派の諸学者との間に起こったのが「活力論争」である。この論争の口火を切ったのが、ライブニッツの『簡潔な証明』(1686)におけるデカルト批判である。この論文が公にされると、デカルト派のカトラン神父がライブニッツに応答する形で論争が始まり、マルブランシュらも巻き込んだ大論争に発展した。ライブニッツとデカルト派の論客とのやり取りは、『文芸国通信』(*Nouvelles de la République de lettres*)の紙上で1691年まで続けられ、それ以降もヤコブ・ベルヌーイやデ・フォルダーとの往復書簡において、この論争に関する話題が取り上げられている。「活力論争」の主題である力の尺度について、デカルトは延長量に速度を掛けた運動量 (mv) によって物体の力を測定するのに対し、ライブニッツは、物体の質量と速度の自乗の積 (mv^2) によって物体の力を測定する。
- ^v 「アルノー宛第16書簡」1687年4月30日 GP.II, 97 河野訳363頁
- ^{vi} cf. 「アルノー宛第13書簡」1686年10月28日 GP.II, 76 ; 「アルノー宛第16書簡」1687年4月30日 GP.II, 96-97
- ^{vii} *ibid.*
- ^{viii} cf. 『新説 フーシェ氏の異議についての備考』GP.IV, 491
- ^{ix} 『新説』第3節 GP.IV, 478 河野訳62頁
- ^x 「デ・フォルダー宛書簡」1703年6月20日 GP.II, 250 工作舎⑨99頁
- ^{xi} 「デ・フォルダー宛書簡」1703年11月10日 GP.II, 257 工作舎⑨106頁
- ^{xii} 「デ・フォルダー宛書簡」1704年6月30日 GP.II, 268 工作舎⑨119-120頁
- ^{xiii} cf. 『形而上学叙説』第11節 A.VI, 4-B, 1544
実体的形相復活の経緯については、Fichant (1998) pp.163-204 を参照されたい。
- ^{xiv} 『新説』第3節 GP.IV, 479 河野訳63頁
- ^{xv} 生命体の場合、魂の働きは表象と欲求によって規定される。自身の表象を自律して展開させていく点に魂の能動性が認められる。表象において外界が表現される場合には、外界の側の変化に対応して表象も変化するが、その変化を生み出す「傾向性 (*tendentia*)」が欲求である。一方でライブニッツは、物体が発露させる作用について「傾向力 (*conatus*)」の概念を用いている (cf. GP.IV, 469)。生命体

における作用と物体における作用の概念をどのように類比的に解すべきかという問題については、今後の課題としたい。

^{xvi} 「vis primitiva, force primitive」は各翻訳、邦語の先行研究の大半で「原始的力」、「原初力」と訳されている。(松田(2004)では「根源力」である。)^{xvi} 「primitivus, primitif」は、ラテン語とフランス語との両方で「初期の、原初の」という意味で使われるのが普通で、「根源的」という訳語をあてるのは稀である。しかし、力学の議論において「vis primitiva, force primitive」が現象としての運動の実在性を根底において支え、形而上学の議論においては実体概念そのものが、この概念によって規定されることから、「vis primitiva, force primitive」概念は自然学の領域を越え、ライプニッツの哲学全体において「根源的な」役割を担っていることが窺える。従って、本論ではこの概念が持つ性格から「根源力」と訳すことにする。

^{xvii} 『第一哲学の改善と実体概念』GP.IV, 469 河野訳 307 頁

^{xviii} 『動力学提要』において指摘されているように、物体の作用には必ず反作用が伴う。二つの物体の衝突を例とした場合、我々には一方が他方を押すように見えたとしても、他方の物体の弾性によって押し返される。この「押す」、「押し返す」という関係すなわち作用と反作用の関係は、我々が一方の物体に依拠した際には作用の次に反作用が生じるように記されるかもしれないが、両物体の衝突による打撃は一つであるから、作用と反作用は同時に生じている。ゲルーが指摘しているように、各々の物体の作用は相互作用においても、自発性の現れとして理解されるのである。cf. Gueroult (1934) p.203

^{xix} cf. 『動力学提要』GM.VI, 237 工作舎③495 頁；『自然そのものについて』GP.IV, 510

^{xx} cf. 「デ・ボス宛書簡」1712年2月5日 GP.II, 435

^{xxi} これら二つの解釈を統一的に理解するのは、山本信(1953)の立場である。山本によれば、物体の現象性が強調される場合、物体は何らかの意識主観によって表象された外的世界の存在であることが含意され、他方、物体の実在性が強調される場合、外的世界の存在が延長する物体となるのは、必ず何らかの意識主観によって表象される限りにおいてであることが含意されている。従って、物体が現象か実在するものであるかは同一の事柄の両面である。

こうした理解に対し、ライプニッツの形而上学の内に、現象の説明に関する「認識の形而上学」と、モノダの存在論的独立性を強調する「実践の形而上学」との二つの契機を見出す松田(2003)の立場が挙げられる。

^{xxii} cf. 「デ・フォルダー宛書簡」1699年3月24日 GP.II, 169-170

^{xxiii} cf. 「デ・フォルダー宛書簡」1701年6月6日 GP.II, 227 工作舎⑨87 頁

^{xxiv} こうした抽象化の働きは想像力に由来する。想像力は或る事物の諸要素に共通

の関係のみを残して抽象する。cf. Gueroult (1934) p.196

xxv 『動力学提要』 GM.VI, 235 工作舎③492 頁

xxvi cf. 『動力学提要』 GM.VI, 237

xxvii cf. 「デ・フォルダー宛書簡」 1703 年 6 月 20 日 GP. II, 251

xxviii cf. 『実在的現象を想像的現象から区別する仕方について』 GP.VII, 319-320

xxix フィンランによれば、この二元化によって、力の概念は実在性という存在論的な特性を保ちつつ、実体的かつ現象的になった。フィンランは、この二元化の直接的契機を、ライブニッツの 1689 年から 1690 年にかけてのイタリア滞在期における動力学の成立に見ている。そして、『新説』で見られる実体概念が、力の概念の深化と連動している点を指摘している。cf. Fichant (2004) pp.102-106

フィンランが指摘しているように、文献上の順序から力学で深化した力の概念と実体論の文脈で問題となる力の概念の深化が連動していると確かに解釈できるかもしれない。実際、1694 年の『第一哲学の改善と実体概念』では、実体概念の解明に必要な力の概念を説明する学問として力学が挙げられている点もフィンランの解釈を支える根拠ともなりうる。

しかし、ラザーフォードが指摘しているように、実体の本性に能動性を認めるという論点は、ライブニッツにおいて力学とは別の領域から派生してきた問題（「作用は基体に属す」という命題をいかに解釈すべきかという問題）であり、力学が新たに実体に能動性を付与するような論点を提供したのではないことは熟考すべき点である。cf. Rutherford (1995) p.135

こうした解釈上の問題も考慮した上で、力の概念が力学の領域で深化したことの意義の一つは、本論で述べたように、物体と運動それぞれに固有の現象性を提示した点にあると筆者は考えている。

※ 本論は 2008 年 9 月に東京女子大学に提出した修士論文『ライブニッツと力の問題』の一部を修正したものです。

文献表

一次文献と略記法

Sämtliche Schriften und Briefe, Deutsche Akademie der Wissenschaften (ed.), Akademieausgabe, Darmstadt und Berlin, 1923ff. [A]

Die Philosophische Schriften von G.W.Leibniz, ed.Gerhardt. reprint. Olms.1965 [GP]

G.W.Leibniz Mathematische Schriften, ed.Gerhardt. reprint. Olms.1971 [GM]

『形而上学叙説』、河野与一訳、岩波書店、1950 年

『单子論』、河野与一訳、岩波書店、1951年

ライプニッツ著作集 全10巻、下村寅太郎他監修、工作舎、1988年以降（工作舎）

※ 本論の引用では、上記の邦訳を用いた。（訳者名は原則的に姓だけにした。）また、訳語を統一するために一部改訳し、筆者の補足部分は [] で表した。

二次文献

Adams, R.M., “Phenomenalism and corporeal substance in Leibniz”, in *Midwest Studies in philosophy*, Vol.8, 1983

Fichant, M., *Science et métaphysique dans Descartes et Leibniz*, PUF, 1998

——, “Introduction. L’invention métaphysique”, in *G. W. Leibniz Discours de métaphysique Monadologie*, M. Gallimard, 2004

Gueroult, M., *Dynamique et métaphysique Leibniziennes*, Les Belles Lettres, 1934

Rutherford, D., *Leibniz and the rational order of nature*, Cambridge university press, 1995

石黒ひで「ライプニッツにおける原初的思考対象の問題」、『思想』第930号、2001年10月

松田毅『ライプニッツの認識論』、創文社、2003年

——「ライプニッツの「物体論」-ライプニッツとバークリの認識論はどう違うのか-」、『神戸大学文学部紀要』第32号、2006年

山本信『ライプニッツ哲学研究』、東京大学出版会、1953年